

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.3

香取市
建設水道部 土木課

神津勇人さん Hayato Kouzu



生まれ育った地域を守るため

インフラの維持管理に奮闘

「現場第一主義」が信条の自治体技術者



● PROFILE ●

こうづはやと
神津勇人

1990年生まれ。千葉県香取市出身。2014年に香取市役所に入庁し、土木系技術者として道路の整備や維持管理を担当している。2016年には東日本大震災の復興支援のため東北に出向した経験もある。

趣味はゴルフで、休日は外で過ごすことが多い。

社会インフラの多くは市町村により管理されており、2013年の国土交通省の調査によると、道路や橋梁の7割近くが市町村管理となっています。一方で、市町村の土木・建築部門の技術系職員の数には2000年代半ばより減少傾向にあるほか、公共事業関係費もピーク時の半分程度に減少しているなど、市町村でのインフラメンテナンスには多くの課題があります。

今回紹介する神津勇人さんは、千葉県の香取市役所の建設水道部土木課に所属する技術職員。道路をはじめとする公共土木施設の整備などに従事し、インフラの維持管理の面から住民の暮らしをサポートしています。

香取市は千葉県の北東部に位置する、人口約7万5000人の街です。インフラの維持管理には前述のような全国の地方自治体に共通する問題も抱える一方、重要伝統的建造物群保存地区に指定される佐原を有し、江戸時代からの町並みを保存するため、独自の対策も必要となります。

一般の人はなかなか接する機会の少ない自治体技術者の仕事。「現場第一主義」と語る神津さんに、これまでの経験や現在の仕事、そして今後の展望を伺いました。

入庁から土木一筋 小さな工事は自分たちでも対応

——市の技術職員を目指したきっかけを教えてください。

私は香取市出身で、自分の町をより住みやすくしたいという思いがありました。またインフラの維持管理の仕事に興味があり、市役所を志望しました。

——これまでどんな業務に携わりましたか。

2014年の入庁以来、道路の改良工事や橋梁補修工事、排水路整備工事などに携わってきました。現在も道路をはじめとする公共土木施設の整備や維持管理を担当しており、具体的には工事の点検や測量、積算や発注業務のほか、道路などの小規模補修を行っています。

——工事の発注や監理だけでなく、実際の測量や小規模な補修も担当されているんですね。

香取市はあまり大きな自治体ではないので、このくらいの規模の自治体であれば市の職員が測量や補修もやっていると多いと思います。ちょっとした道路の穴なら常温合材で埋めたり、法面に小規模な崩れが生じている状況であれば土のうを設置したりと、基本的には私たちができることはほとんどやっています。

——担当する業務の中で、注力されていることはありますか。

維持管理を進める上で、住民の皆さんの要望に応えることが重要になります。そのため、要望に添えるようにできる限りの対応をしています。ただ、どうしても予算の関係で完全に対応することができない場合があります。そういったときに、住民の皆さんが納得のいくように説明することの難しさを感じています。

——住民からの要望や依頼は増えているのでしょうか。

以前は道路などに不具合があっても通報には結びつかないことが多かったのですが、今はSNSなどの連絡手段が増えたこともあり、通報量は増加傾向です。対応の遅れは苦情やクレームにつながってしまう可能性がある一方で、私たち市の職員だけでなく建設業者の方にも協力してもらい早期対応を心がけています。

——住民との関係構築で意識していることはありますか。

住民の皆さんとのコミュニケーションを大切にしています。私は、皆さんから親しみを感じてもらうことが重要だと思っているので、敬語ではあるけれどもあまり丁寧になり過ぎないような言葉遣いを意識しています。こうした対応をすると、住民の方も気軽に話してくださるような気がします。

景観維持や利便性を考慮した インフラメンテナンス

——香取市には「小江戸」とも呼ばれる佐原の歴史地区があり、伝統的な町並みが保存されています。維持管理の面で大切なことを教えてください。

道路や歩道を町並みに合わせる必要があります。工法選びは難しいです。一般的なアスファルト舗装だと風情がなくなってしまうので、現場に行って実際の状況を確認し、適した工法を選ぶようにしています。

ただし、景観だけでなく利便性も考慮します。例えば、景観を重視してブロックで舗装していた道路があったのですが、通行する際にガタついたり段差ができたりにして、バリアフリーの観点から問題がありました。このため、アスファルト舗装の上にペイントを施



施工前



施工後

佐原における道路美化の施工例。住民も交えて町おこしを行っており、川沿いの歩道も景観になじむような工法が選定された。



小野川沿いに昔ながらの商家が残る佐原の町並み。「北総の小江戸」とも呼ばれ、水郷として多くの観光客が訪れている。



施工前



施工後



施工前



施工後

神津さんが担当した末広橋の改修。観光船が橋の下を通過するため主桁の色の選定に注意が払われた。また、改修後は高欄が高くなり安全性に配慮されているほか、道路のガタつきも改善されているのが分かる。

しブロック調のデザインにすることで、景観と利便性に配慮した補修を行ったこともあります。

また橋梁の補修なども手掛けていますが、佐原は水郷として知られるように伝統的な町並みが川沿いを中心に残されています。「加藤洲十二橋めぐり」という観光船が通る橋の補修では、多くの観光客の方が目にする主桁の色選びに苦勞しました。また、学校の通学路になっている橋でもあったので、1年間かけて工事を行いました。

—— 香取市にはどのくらいの橋梁があるのでしょうか。また、補修はどのように行っていますか。

410橋あり、技術職員3名で監理しています。点検は5年に1回行い、橋の状態を4段階で判定して状態の悪い橋から補修していきます。全てに対応できるわけではないので、部署内で予算をどのように使うか相談し、協力し合いながら計画を立てています。

—— インフラを整備する上では建設業者の協力も欠かせません。どのように連携を取っていますか。

年に1回、地震・風水害・その他の災害応急対策に関する業務協定を締結している建設業者の皆さん約30社が参加する意見交換会を行っています。国の政策に準じて、香取市でも全ての工事を原則週休2日制にする予定です。また、最近の気候変動を踏まえて熱中症対策も対応していきます。これらの取り組みは、建設業者の方からの意見を反映したものです。

東北での復興支援を経験 市職員として災害時への覚悟を持つ

—— 神津さんは2017年から2年間東北に出向し、東日本大震災の復興支援に携わったと伺いました。東北ではどのような活動を行ったのでしょうか。

道路事業3件と、防災集団移転という被災された方たちの住宅を高台に移転するための団地づくりに従事しました。震災から4年が経っており、復興の取り組みとしては最後の方でしたので、復興支援の仕組みは整備されていました。しかし、その段階でも沿岸部では住民の皆さんが仮設住宅に住んでいるような状態でした。

被災の状況を自分の目で実際に見たという経験は大きく、また香取市では携わることがないトンネルの事業などに関わったことも勉強になりました。

—— 香取市も東日本大震災のときには液状化などの被害に見舞われました。今年に入って能登半島地震も起こりましたが、今後災害が起こった場合の市職員としての心構えをお聞かせください。

市役所は、住民の皆さんの生活を守る役割があります。復興支援での経験を活かして、災害時には全力で取り組む所存です。また、町のことは私たちがよく知っていますし、最前線に立って復旧に努めたいと思っています。

業務の省力化を図りつつも メンテナンスは「現場第一主義」

—— ささまざまな業界で人材の不足が叫ばれています。市役所でも人手不足を感じることはありますか。

私は入庁して10年目ですが、私の下は5年空いており、募集しても新たな人材が安定して入ってこないという現状があります。自治体の職員に限ったことではないと思うのですが、都市部には人材が集まるものの、この地域では募集してもなかなか集まらないんです。

先ほどお話ししたように、小規模な補修工事などは自分たちで行うようになり、以前に比べて職員の業務は

増えている一方で、それに対応できる人員は減っているというジレンマもあります。

—— 人手不足を解決できるようなアイデアはありますか。

道路の補修などを建設業者の方ではなく市役所の職員が行う場合、私たちのような技術職だけではなく事務担当の職員にも対応をお願いすることがあるのですが、これをもっと進める体制を作っていきたいです。土木分野というのは技術がなければ難しいというイメージがあると思うのですが、技術者でなくても取り組めるということが広がれば、人手不足にも対応できるのではないのでしょうか。

—— 最近では現場に行かなくても状況を遠隔で確認できるツールなども増えています。こうしたものを今後活用していくお考えはありますか。

業務の省力化は常に念頭にあり、それも一つの手段だと思えます。ただ、私は現場に行つてどうという状況なのか確認したいという気持ちがあります。例えば道路が陥没している場合、ただ凹んでいるのではなく内部が空洞になっていることも考えられ、対策の方法も変わってきます。自分の目で現場を見ないと不安になってしまふんですね。

—— 神津さん自身は現場を見ることを重要視されているんですね。

先輩たちからも「現場を見るのが大事」と教えられたことが心に残っていますし、「現場第一」というのが仕事をする上で自分の軸になっていると思います。

—— 自治体職員としてインフラに携わる仕事というのは、どういう人に向いていると思いますか。

私もそうなのですが、多くの人と直接関わりながら問題解決できるということに魅力を感じる人は向いて

いるのではないかと思います。また、フットワークが軽く、現場を見るのが好きな人というのも大事な要素かもしれません。

—— これから同じ仕事を目指す人や若手技術者へアドバイスをお願いします。

私たちの業務は町全体の生活を支える仕事です。町を活性化させる役割がある反面、自然災害が発生した際には早急に対応していく必要もあり、一筋縄ではないような場面もあります。そんなときには一人で悩まず、分からないことがあれば積極的に周りを頼ることで問題を解決できると思います。

私は、この仕事は自分が携わった成果が形として残る魅力的な仕事だと思っています。インフラの未来を担う技術者として重要な役割を果たしていただけることを心より期待しています。

(取材日：2024年1月)

経済調査会における 災害復旧資材の供給情報提供窓口

今回の神津さんのお話の中で、被災地支援に関する話題が登場しました。

災害発生時、被災地では一刻も早い被害への対応が求められるため、復旧工事に用いる資材や供給元に関する情報は必要不可欠です。

経済調査会のホームページでは、被災地域における主要資材の供給プラント・工場の稼働状況や復旧・復興工事に関わる資材価格および供給情報を収集・集約し、随時提供しています。

【URL】(別サイトへ移動)

https://www.zai-keicho.or.jp/service/build/disaster_recovery/

● 取材後記 ●



インフラメンテナンスの仕事は「好きだし向いていると思う」と穏やかに話す姿が印象的な神津さん。一方で、人手不足という問題への解決策を思索するほか、災害時には町を知っている自分たちが率先して動きたいと話すなど、生まれ育った香取市をより良くしていきたいという確固たる思いが感じられました。



夏と秋には「佐原の大祭」も開催され、県内外から多くの人が訪れる佐原。佐原地区はじめ、香取市のインフラ維持には神津さんら市職員の働きが不可欠なものとなっている。